

桜蔭俳話会 三月句会 (第三三三回)

平成二十六年三月二十四日(月)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

- 3点①指折りて褪し衣の雛飾る ツル子  
3点①目借時なかなか開かぬコルク栓 才美  
3点①菜の花の黄に埋づもれて絵の稽古 ヤエ子  
3点 紙雛しかと踏ん張る震度三 明美  
3点 凍てつきし石仏ほぐす辻の春 ツル子  
2点②赤子抱く春満月の重さかな 守  
2点①啓蟄や廃工場の稼働音 明美  
2点①風光る見馴れし街の千の窓 弘子  
2点①春の航我には我の羅針盤 守  
2点 花エリカ外つ国からの嫁迎ふ ヤエ子  
2点 下萌や埃払ひし旅靴 秀一  
1点①攫はれし町の川筋草青む 守  
1点①いつよりか路地に遊ばず春夕焼 弘子  
1点 春の日のあるかぎりの歩岬回や ツル子  
1点 小さくも一途に舞うや黄蝶かな ヤエ子  
1点 蜃気楼はなし半ばに終はりけり 守  
1点 春星ややぎさんゆうびん口ずさむ 葉子  
1点 菜の花や川改修の最中なる 友子  
1点 春愁やウインドー飾る赤き靴 清子  
1点 遊蝶花程よき距離の間柄 友子  
1点 石鹼玉吹く子供にも格差かな 秀一  
1点 褒められて歩みかるやか花ミモザ ヤエ子  
1点 それなりの姿なつかし観桜会 葉子  
1点 なほざりの庭にすみれの色あふる 弘子  
1点 蒲公英や「右向け右」は好きですか 才美  
1点 「我が闘争」出版の是非春一番 秀一  
1点 建国の日や若者の心意気 友子  
1点 地震波のうねりかすかや朧月 明美  
1点 高千穂の峡の深きに芽吹きあり ツル子  
1点 外灯のスイッチ気づかぬ遅日かな 葉子  
1点 玉堂の描きし御岳春時雨 ヤエ子  
1点 洪滞の車窓を飾る枝垂梅 幸  
1点 春光や手庇で待つ停留所 弘子  
1点 忘れ物多き旅なり水温む 友子  
1点 磯遊びセーラー服の二人かな 明美

※

川上へ飛び立つ鷺の白勝る 清子  
手袋の盗難感知器解く技士 幸  
紐一本残しめぐらす雛納め 幸  
お雛様桜餅の香匂ひいでし 直子  
雪あかりネオンあざやか立佞武多 真壽  
草青む消え入りそうな昼の月 弘子  
付け合ひし渾名と別れ卒業す 秀一  
オリオンや想定外のことばかり 幸  
細き幹梅ほころびは見頃なり 直子  
よくつづく幼のあゆみふぐり咲く 清子  
陽炎や枯葉さくさく鎌倉山 直子  
ペンギンがヨチヨチ歩く雪の道 真壽  
春近し北国はまだ雪一色 真壽  
法会あと語るや僧の霞かな ツル子  
日時計の半刻のずれ烏雲に 才美  
みどり児へ春のひかりのあふれけり 友子  
咲き初めし三極に寄る親子かな 清子  
周五郎読む如月の夜の雨 幸  
雪降るや歩きにくくも笑顔なり 直子  
雪まつりかんじき履いてる観光客 真壽  
完成の橋のたもとの梅紅白 清子  
待ちわびる鶯の声朝の床 葉子  
花菜雨伏せしままなる翻訳書 才美  
運掛けのミモザの枝や雪ぞ折り 幸  
香り来る姿の見えぬ沈丁花 葉子  
日に日にと蓄ふくらむ我が想ひ 直子  
雪祭り歓声あがるスベリ台 真壽  
お習字は祖母さまゆずりつくづくし 才美  
ははに告ぐ土手の桜の一分咲き 秀一  
(不在投句 古野明美、原田清子)

「事務局からお知らせ」

○四月句会

四月二十七日(日)午後一時から、旭区民文化センター(サンハート)で行います。

○五月句会

五月二十五日(日)鎌倉で吟行します。